

表7 「中高型+平板型」のアクセント

座標	0	1	2	3	4	5	6	7
0		総数	多数型		少数型		少数型の「典型」型	
			語数1	割合1	語数2	割合2	語数3	割合3
4	④中 ₁ +平 ₂	95	87	91.6%	8	8.4%	中1-7	87.5%

「中₁」が活かされた割合は(7/95=)7.37%で、「平₂」の割合は(2/95=)2.07%である。「中₁>平₂」が実証され、(4)の関係があると言える。

$$(4) \quad \text{頭}_2 > \text{中}_2 > \text{頭}_1 > \text{中}_1 + \text{中}_1 > \text{平}_2 = \text{頭}_2 > \text{中}_2 > \text{頭}_1 > \text{中}_1 > \text{平}_2$$

仮説3と少し異なるが、核の活かされやすさの順位として、「頭₂(多数型)>中₂>頭₁>中₁>平₂(平₁)」が実証されたと言えよう。

最後に、以上の考察を通して、二字漢語アクセントの結合規則を簡単にまとめよう。

単純語AとBが複合して[AB]となり、「頭₂(多数型)>中₂>頭₁>中₁>平₂(平₁)」においてAのアクセント型がBの前にあると、複合後のアクセントは多数型になるか、Aの核に従う。逆にBの前にあると、Bの核に従うかという多数型になる。

5. おわりに

本稿は、『新明解』より選出した2306語の「二字+二字」四字漢語を対象に、15パターンに分け、二字漢語アクセントの結合規則を考察した。その結果、「頭₂(多数型)>中₂>頭₁>中₁>平₂(平₁)」の順によりアクセント核が活かされやすいと結論付けた。

ただし、本稿はあくまで「可能性」を考察しているだけで、プロトタイプを論じているわけではない。実際このようなアクセントの結合規則が「ありえる」としか言いようがなく、「三字目頭拍を核にしてしまえばいい」という無難な読み方もあるわけである。今後の課題として、「二字+二字」だけではなく、「一字+三字」などの四字漢語をも対象として考察を進んでいきたいと考えている。

参考文献

- 金田一春彦(監修)・秋永一枝(編集)(2001)『新明解日本語アクセント辞典』三省堂
 金田一春彦(1967)『日本語音韻の研究』東京堂
 佐藤大和(1993)「共通語アクセントの成因分析」『日本音響学会誌』49巻11号:775~784 日本音響学会
 佐藤大和(1989)「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」『講座日本語と日本語教育』2巻音声・音韻 233~264 明治書院
 柴田武(2005)「日本語のアクセント」『アクセント論集日本語研究』7~14 汲古書院
 鶴岡昭夫(1988)「複合名詞のアクセント」『日本語学』5号:13~22 明治書院
 真葛建志郎(1986)『四字熟語 博覧辞典』厚徳社

『明治の文豪』における接続詞「と」について—接続助詞との共通点から—

高谷由貴(大阪大学文学研究科国語学専門分野博士後期課程)

1. はじめに

本発表は小説等に現れる接続詞「と」(以下「ト」と表記)の特徴について接続助詞ト及び接続詞スルト/ソウスルトとの共通点・相違点から明らかにするものである。まず以下に、接続詞トの例を示す。

- (1) やがて陰士は山の芋の箱を恭しく古毛布にくるみ初めた。なにかかからげるものはないかとあたりを見廻す。と、幸い主人が寐る時に解きすてた縮緬の兵古帯がある。陰士は山の芋の箱を此帯でしつかり括つて…(吾輩は猫である)
- (2) そのとき「貴様は同級生の中で、誰が一番好きだ」といふ問題がゆくりなく出た。小學校時分の同級生が大分其周囲に集って居た。と、小滝は少しも躊躇の色を示さずに、「それア誰だつてさうですわねえ、……無論林さん!」と言った。(田舎教師)

上の二例は、「明治の文豪」に収録された小説の地の文におけるトの使用例である。(1)は、陰士が「あたりを見廻」したところ「縮緬の兵古帯がある」のを発見する場面である。(2)は同級生が「集まっていた」際に「無論林さん!」と質問に答えたという経緯を表している。このような文で使用されるトについて「明治の文豪」における用例を調査した結果、次の3点が判明した。

- i) 小説においては、地の文のみにて使用されること
- ii) 事態の急な展開を示す際に使用され易いこと
- iii) 基本形で終了する文に後続する例が半数近く見られること

これらの特徴のうち、i、iiについては、スルトとの相違が見られ、iiiについては接続助詞のトとの類似性が見られる。このような特徴が見られる理由について、トが小説の語り手の視点から事態を描写する際に多く用いられることを指摘する。その際、語り手の視点から「探索(定延2001他)」を行うという解釈を示す。以下2節で関連する先行研究を紹介する。その後、3節で研究目的及び研究方法を述べ、4節にて調査結果、5節にて分析を行い、6節にてまとめを述べる。

2. 先行研究

接続詞トに関連する先行研究としては、接続助詞トに関する記述、接続詞スルトに関する記述が多く見られる。主なものをここで挙げておく。

まず、接続詞スルトに関する先行研究を挙げる。市川孝(1978)永野賢(1986)による分類では、現代語のスルトは順接を表す接続詞であるとされている。順接とは「前の内容を条件とするその帰結を導く」(市川孝1978:66)ものであり、二つの事柄を論理的に結びつけて述べる際に使用されるとされる。スルトの成立については「近世後期のこととみられる」(小林1996:220)という報告がある。

次に、接続助詞トに関する先行研究を挙げる。小林(1996)では、狂言台本における順接条件の接続助詞「ト」を調査している。それによれば、接続助詞トは近世に於いて成立・発達したとされる。小林は近松世話浄瑠璃・歌舞伎脚本・狂言台本を調査した結果、次の三種の接続助詞トを報告している。(小林:pp.213-221)

- a. 同時・即時的表現。及び偶然確定条件の表現
- b. 順接仮定条件の表現
- c. 順接恒常条件の表現

現代日本語研究において、接続助詞トは「バ」「ナラ」「タラ」と並んで条件の表現の基本的な形式として位置付けられている(益岡・田窪1992, 有田2006)。益岡・田窪(1992)においては、ある二つの事態間の偶発的な依存関係を表し、「述語の基本形+と」という形式をとることが記述されている(「彼は、少しでも金が入ると、いつも、それを博打に使う。」(益岡・田窪1992:192)。このように、接続助詞トと接続詞トへの文法変化に係る記述は豊富に見られる。今回は先行研究では言及されていない接続詞トの観察、およびスルト/ソウスルトとの比況を試みる。

3. 研究の目的及び方法

本研究の目的は、接続詞トの特徴について、これが用いられる文体や、前後の文の特徴によって分類し、特徴を明らかにすることである。その際に、接続詞トの特徴について接続助詞ト及び他の接続詞との共通点・相違点にも着目する。筆者の内省では、接続詞のトは現代日本語において会話では用いられないようである。それを会話／非会話での文を含む「明治の文豪」の用例を調査することで明らかにすることも目的とする。

次に、研究方法について述べる。「明治の文豪」の全用例を調査対象とし、トが用いられる文体や前後の文の特徴をもとに用例を分類するというものである。その際スルト及びソウスルトの用例も確認しトと比較しまとめた。これは、接続助詞トの発達とスルトの成立とが関連付けて論じられることが先行研究で散見され（小林：1996等）、両者に共通点があると判断したためである。また、今回の分析において、引用語のト及びその述語は分析対象から外している。

(3) すると主人は忽ち大きな声で「おい」と呼びかけた。

細君は吃驚して「はい」と答えた。 (吾輩は猫である)

(4) 若い男の心持なら、自分でも大抵分る。恋の可能を持っている若い女の観察が当面の急務だ。と、こう考え詰めてみると、私の人生研究はつまり若い女の研究に帰着する。

(平凡)

(3) のように台詞の引用のトを除くだけでなく、(4) のように、思考の内容に続いて「と」と述語が続いているものも考察対象から除いている。トの前接文が読点「、」で終わる場合も、句点「。」で終わる場合も考察の対象とする。「明治の文豪」に収録されたデータから、句点／読点の直後のトを抜きだし、手作業で上記のような引用のものを除いた。

4. 調査結果

「明治の文豪」におけるトについて判明した三点について、一点ずつ説明する。

i) 地の文でのみ使用される。スルト及びソウスルトは会話文頭／会話文中にも使用されるのに対し、トは地の文でのみ使用される。表1は地の文／会話文頭／会話文中ごとの使用状況をまとめたものである。総用例数はト59例、スルト952例、ソウスルト89例である。スルト、ソウスルトについては会話の例がそれぞれ40例と34例見られたが、トは会話の例が見られず、地の文でのみ使用されることが分かった。

ii) 事態の急な展開を示す際に使用され易い。トには「いきなり」等の急な事態の展開を描写する例が7例（全用例59例中12%）見られたが、数日～数週間の期間を経て事態が展開する例は見られなかった。一方、スルトは前者が13例（1%）後者が3%程見受けられ、トの結果と異なっている。トは長い期間を経て展開する事態は描写することができず、瞬間的な事態の推移、その場の視点人物の立場から描写するものである。

iii) 基本形で終了する文に後続する例が半数近く見られる。

述語の基本形で終了する文にトが後続する例が全用例60例中30例見られた。以下のような例である。

(5) …一しきりしてはたと其が止むと、あとは寂然となる。と、私の心も寂然となる。(平凡)

それぞれについて、次節以降で詳しく見ていく。

4.1. 地の文におけるトの使用

本節では地の文・会話文においてトが使用されるか否かについて調査した結果を示す。その結果トは「明治の文豪」中の地の文で使用され、会話で使用されないことを確認した。以下の表1では、会話文・地の文を分けて、「明治の文豪」における使用状況を観察した。

表1 地の文・会話文の用例数

	と	すると	そうすると
地の文	59	912	55
会話文頭	0	37	14
会話文中	0	3	20
合計	59	952	89

表1にあるように、「明治の文豪」における用例数はそれぞれト59例、「すると」952例、「ソウスルト」89例であった。スルト・ソウスルトについては、会話文の例がそれぞれ40例と34例見られた。これを、「会話文頭」「会話文中」に分けて表示している。会話文の例は以下の(6)(7)のような例である。相手の発話を受けている(6)のような例も、1人の人物が話し続けている(7)のような例も見られた。

(6) 「自然は皆第一義で活動しているからな」

「すると自然は人間の御手本だね」

(虞美人草)

「なに人間が自然の御手本さ」

(7) 「そこで折々ひとりで考えてみたのです。そうすると、自分の思想が凡て利己的なようなのですね。しかもけちな利己主義で、殆ど独善主義とでも言っているように思われたのです。ところが、僕なんぞの…」

(青年)

(6) の例は相手の発言を受けて考察し、自分の意見を述べている。このような例は、表1では「会話文頭」に分類した。(7) の例は「ひとりで考えて」みると、自分の思想が利己的であるという考えに至ったという内容である。このような例を、「会話文中」とした。いずれもトの例は見られず、「明治の文豪」中の例においては、会話でトは用いられないことが分かる。スルト・ソウスルトの地の文・会話文の例をグラフ化すると以下ようになる。

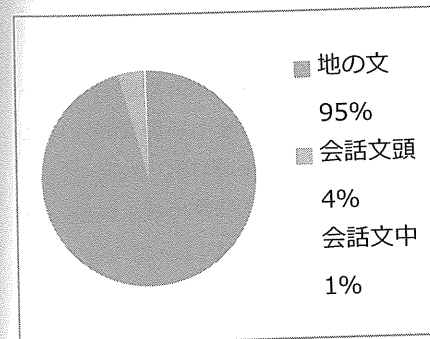


図1 スルト

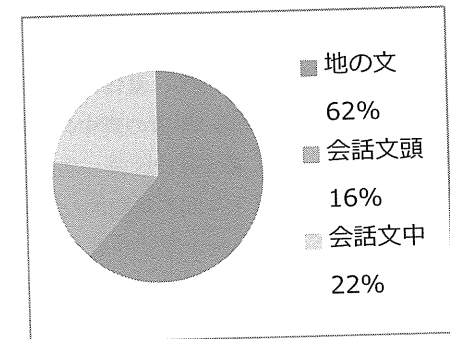


図2 ソウスルト

ここまで、スルト・ソウスルトとの比較を通して、地の文でのみトが使用されることを確認した。

4.2. 事態間の時間の経過について

本節では主にトの後接文に着目し、時間の経過に関する記述の有無とその種類を記述する。今回採集した「明治の文豪」におけるトの後節文中には、「いきなり」、「急に」、「そのとき」、「そこへ」等、その事態が短い期間内に出来たことを示す語が散見される。このことから、「明治の文豪」におけるトと、後節文中の出来事の時間関係に注目する。次の(8)(9)の例を見られたい。

(8) お梅は夫が来たので、代って家に帰るべく母親に挨拶して茶の間に来た。と、お梅はいきなり、「お梅さん、先程何を話していたの?」「え?」調子が烈しいので、若い細君は驚いて義姉の顔を見る。(生)

(9) 頭を散々悩ませつつ、一枚二枚は余所目を振らず一心に筆を運ぶが、其中に曖昧な処に出会してグッと詰まると、まず一服と旧式の烟管を取上げる。と、又忽然として懐かしい昔が眼前に浮ぶから、不覚それに現を脱かし、肝腎の翻訳がお留守になって…(平凡)

(8)では、「茶の間に来た」後に「いきなり」お梅さんに話しかけており、(9)は「烟管を取上げる」という動作の後に「忽然として」昔のことが浮かぶという内容である。このように、「不意に」「いきなり」といった、後接文の事態が急に展開することを描写する語彙が含まれる例は7例見られた。

次に、(10)を見てみよう。

(10) 実に死ぬ方が楽なほど疲れ切っていた。それで、横になるとすぐ——畳から足を引っ込まして、頭を布団に入れるだけの所作を仕遂げたと思うが早いか、眠ってしまった。ぐうぐう正体なく眠ってしまった。これから先きは自分の事ながらとうてい書けない。…すると、突然針で脊中を刺された。夢に刺されたのか、起きていて、刺されたのか、感じはすこぶる曖昧であった。(坑夫)

(10)のように、後節文で描写される事態が短い時間内に起こる例は、「すると」にも13例見られた。一方で、「すると」の中には、前接文中の事態と後接文中の事態に一定期間の隔りがあるものも見受けられる。次の(11)の例は、「日光に浴していた」時点から「四日ばかり」の時間が経っているという内容である。数日間よりも長い例も見られ、(12)では青年が「それぎり来なくなった」時点から、再び現れるまでに季節が変わるほどの期間が空いている。

(11) そんな望みを抱いて、彼は毎日美しい日光に浴していたのである。

すると四日ばかりして、又田口から電話が掛った。少し頼みたい事が出来たが、わざわざ呼び寄せるのも気の毒だし…(彼岸過迄)

(12) 御祖母さんは去る大名の御屋敷に奉公していた。…その中に崑山の画いた手長猿の幅がある。今度持って来て御覧に入れましようと言った。青年はそれぎり来なくなった。

すると春が過ぎて、夏になって、この青年の事も何時か忘れる様になった或日、——その日は日に遠い座敷の真中に、単衣を唯一枚つけて、じっと書見をしていてさえ堪えがたいほどに暑かった。——彼れは突然やって来た。(永日小品)

このように、数日～数か月間の時間的な隔りがある事態を結びつける例が、「すると」の前用例中27例見られた。

一方、ソウスルトについて今回採集した89例の中には、「いきなり」等の副詞を伴って急な事態の展開を示すものは見られなかった。ソウスルトの例を一つ見てみよう。

(13) そのうちに夏目金之助君が小説を書き出した。金井君は非常な興味を以て読んだ。そし

て技癢を感じた。そうすると夏目君の「我輩は猫である」に対して、「我輩も猫である」というようなものが出る。「我輩は犬である」というようなものが出る。(キタ・セクスアリス)

(13)の例では、読んだ本の内容について興味を感じ、その後思い浮かぶことが様々あるという内容である。このように、「そうすると」には急な事態の展開を示す語彙などは見られない。また逆に、数日～数か月の期間が過ぎたとする記述が後続する例も見られない。以上の時間の経過を示す副詞等の語彙を含む用例数をまとめると下の表2のようになる。

表2 時間の経過を示す語彙

	と	すると	そうすると
急な事態の出来	7	13	0
数日-数時間後	0	27	0
時間の表記なし	52	912	89
合計	59	952	89

上の表は時間の経過を示す語が見られたト/スルト/ソウスルトについてまとめたものである。トについては、具体的に時間に関する語が含まれない52例についても、長時間の隔りがあったものは見られなかったことを付け加える。次の例を見てみよう。この(14)ではトの前後の事態「座敷へ行く」「其処に床が敷つてある」の間には時間的な隔りほとんどない。

(14) 二人一緒にこう奥まった座敷へ行く。と、もう其処に床が敷つてある。夜具も郡内か何かだ。私が着物を脱ぐと、雪江さんが後から…(平凡)

本節では、ト/スルトが使用された際の時間の経過についてまとめた。トについては短い時間内に事態が推移する際に多く使用されることを確認した。

4.3. 動詞の基本形に後続するト

本節では、トの前接文に注目する。動詞の基本形に接続するトについてこれらの例は、発表者の内省では想定し難いものである。次の(15)(16)の例を見てみよう。

(15) …快活な高声や、低い繊弱い声が紛々と絡み合つて、何やら切りに慌しく話しているように思われる。一しきりして碯と其が止むと、跡は寂然となる。と、私の心も寂然となる。その寂然となった心の底から、ふと恋しいが勃々と湧いて出て、私は我知らず涙ぐんだ。(平凡)

(16) かからげるものはないかとあたりを見廻す。と、幸い主人が寐る時に解きすてた縮緬の兵古帯がある。陰士は山の芋の箱をこの帯でしっかり…(吾輩は猫である)

(15)(16)の例は、「跡は寂然となる」「見廻す」といった、動詞の基本形で終わる文にトが後続する例である。次に(17)を見てみよう。

(17) おかしな事をいうとは思ったが、使に出ていて今朝の騒動を知らないから、お鍋はそのまま降りてしまう。と、独りになる。「へ、へ、へ」とまた思出してあざわらった……が、ふと心附いてみれば、今はそんな、つまらぬ、くだらぬ、薬袋も無い事に拘わっている時ではない。(浮雲)

(17) の例も動詞の基本形「降りてしまう」で終わる前接文に「と、独りになる」が後続している。このように、動詞の基本形で文が終わり、その後にはトが後続する例は30例見られた。これらは、句点「。」により文が区切られなければ接続助詞のトのように解釈できるものである。全用例中の約半数の前接文がこの基本形で終了するものである。

5. 分析

4節において「明治の文豪」におけるトについて判明したことを三点述べた。以下でそれぞれについて記述し解釈を加える。

一点目は i) 地の文でのみ使用される。スルト及びソウスルトは会話文頭／会話文中にも使用されるのに対し、トは地の文のみで使用される。スルト、ソウスルトについては会話の例がそれぞれ40例と34例見られたが、トは0例であった。

二点目は、ii) 事態の急な展開を示す際に使用され易いことである。トには「いきなり」等の急な展開を描写する例が7例(全用例59例中12%)見られたが、数日～数週間の期間を経て事態が展開する例は見られなかった。一方、スルトは前者が13例(1%)、後者が3%程見受けられ、トの結果と異なっている。この結果からトは長い期間を経て展開する事態は描写することができないことが判明した。

i) ii) の特徴である、地の文で使用され、瞬間的な事態の推移を表すことができるという理由として、定延(2001)等によって導入された認識的な「探索」の概念を用いて分析してみよう。「探索」とは、典型的には「未知の空間がどんな領域なのか調べること(定延2001:116)」である。探索が及ぶ領域(=探索領域)が未知のものであればあるほど、探索は行われやすい。また、「探索領域はどんな領域なのか?」という問題意識が必要とされる。「明治の文豪」のような小説においては、視点人物が問題意識を持って探索を行うと考えられる。視点人物の動作の最中またはその後短時間のうちに生じた出来事について、トの後で述べられる。この「探索」が観察されるのは以下のトの使用例である。

(18) やがて陰士は山の芋の箱を恭しく古毛布にくるみ初めた。なにかかからげものはないかとあたりを見廻す。と、幸い主人が寐る時に解きすてた縮緬の兵古帯がある。陰士は山の芋の箱を此帯でしつかり… (吾輩は猫である)((1)再掲)

上の(18)の例は、『吾輩は猫である』の一節である。この場面は「陰士」を観察する猫の視点で描かれている。「かからげものはないか」と周辺を見廻す陰士は、周囲の空間を「探索」しているといえる。陰士にとっては、猫のいる家は未知の空間である。目的のものがいないか探して、「縮緬の兵児帯」に気付く際に、トが使用されている。これは、小説における地の文においては、物語の語り手や登場人物の視点で、事態の推移を示す場合や、気付いたことを描写することが多いためであると考えられる。これについては、前田(1989)において、小説の「語り」の成立が指摘されている。「他者の内面について語る語り手が、作品世界の中に定位されたときに、明治の小説は近代小説としての資格を手に入れたのである(前田1989:445)」とあるように、明治期の小説においては語り手の視点からの描写が多く見られる。

次の(19)(20)を見られたい。この2例においても、視点はこの小説の語り手にある。

(19) …これ喜野、あすこの広間へ行ってな、内の千がそう言うたて、誰でも弾けるのを借りて来やよ。」

とぼんとしていた小女の喜野が立とうとする、と、名告ったお千が、打傾いて、優しく口許をちよいと曲げて傾いて、「待って、待って、」 (歌行燈)

(20) コツコツ廊下から剥啄をした者がある。と、教頭は、ぎろりと目金を光らしたが、反身に伸びて、「カム、イン、」と猶予わずに答えた。 (婦系図)

(19)は「小女の喜野が立とうとする」その時にお千が声を掛ける様子が、(20)は「剥啄をした者がある」というその瞬間の教頭の様子を描写している。ここまで、一、二点目に関する分析を行った。

三点目は、iii) 述語の基本形で終了する文にトが後続する例が多く見られたことである。トの全用例59例中30例見られた。句点により文が区切られなければ「寂然となると、私の心も…」のように接続助詞として解釈できるものである。「、」による区切りを入れるか否かは、小説の著者の判断によるところが大きいと思われる。区切られることと、一点目、二点目のような特徴との関連については、今後も考察を深めたい。

このような、動詞の基本形に「、ト」「ト」が続く例が多く見られることは、接続助詞から接続詞へ変化する段階を示す可能性があると考えている。ここで、文法変化に関連する先行研究を挙げて検討する。接続助詞と接続詞の文法変化については、小野寺(1996)小柳(2016)等により報告されている。小野寺(1996)では、日本語の接続詞の多くは、動詞から変化して成立したとしている。その例として、文頭の接続詞「だから」を挙げている。「だから」は江戸時代に用いられるようになった(青木1973:243)が、その出現以前に「動詞の基本形+カラ」が文中の節末において使用され始めたことを小野寺は指摘した。その後17世紀に文頭で用いられるようになり、同時期に一般動詞と「から」が結びついてきたものが、「だ」と「から」とが結びつくようになったとしている。トについても、「動詞の基本形+ト」の形式が節内で用いられるようになった後に接続詞となった可能性が考えられるのではないかと推測している。この点については今後さらに資料を遡り検証したい。

また、小柳(2016)によれば、文法変化には一定の方向性が見られ、助詞等の付属的機能語は、接続詞のような自立的機能語には変化しにくいとされている(小柳2016:56)。その一方で、例外的な変化の例として、接続助詞から接続詞へ変化も指摘されている。

a. 接続助詞→接続詞

b. ところで(16-17C) が(18C) けれども(18C) と(19C) ところが(19C)

これらは、接続助詞が自立化して句頭部に位置する接続詞に変化した一群の例として(Matsumoto 1988:340-341)によって指摘されたものである。接続助詞ト→接続詞トについても、近世以降接続助詞として成立したトが、区切られることにより接続詞となったものと考えられる。ここまで、三点目の分析を行った。トにより文が区切られることと、一点目、二点目の、小説の地の文において急な事態の変化を表しうることとの関連については今後より深く検討していきたい。

6. まとめ

新潮社刊行の「明治の文豪」中のトがどのように使用されるか観察するとともに、順接の接続詞スルト及びソウスルトの使用例も確認した結果、三点が判明した。

一点目は、この二つが会話文中でも使用されるのに対し、トが会話では使用されないことを確認した。

二点目は、時間の経過についてである。トの例には後接文の事態が前接文の事態に続きすぐに生じるという内容の例が見られるのに対し、数日数時間の期間が空いた後に次の事態が生じるという内容のものは見られなかった。

三点目は、前接文の述語についてである。トの前接文に注目すると、動詞の基本形で終わる文に後続するものが約半数見られた。このような句点による区切りが無ければ接続助詞のようにもみられるトが、用例中の半数程度あることが判明した。

【資料】

明治の文豪 新潮社 (1997) 『CD-ROM 版明治の文豪』 (本文では略称表記: 「明治の文豪」)
本文中に引用した作品名を以下に挙げる。本稿にあげた用例は、全集や単行本を参照し、当該部分の認定に問題がないことを確認した。

森鷗外『青年』『キタ・セクスアリス』/二葉亭四迷『其面影』『浮雲』『平凡』/夏目漱石『吾輩は猫である』『虞美人草』『坑夫』『彼岸過迄』『永日小品』/田山花袋『生』『田舎教師』/泉鏡花『歌行燈』『婦系図』

【参考文献】

青木伶子 (1973) 「接続詞および接続詞的語彙一覧」 鈴木一彦・林巨樹 (編) 『品詞別文法講座第6巻 接続詞・感動詞』 pp.210-53. 明治書院.

有田節子 (2006) 「条件表現研究の導入」 益岡隆志 (編) 『条件表現の対照』 pp.3-28. くろしお出版.

市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』 教育出版.

小野寺典子 (1996) 「動詞から接続表現へ: 日本語における grammaticalization と subjectification の一事例」 『柴田武先生喜寿記念論文集 言語学林 1995-1996』 pp.457-474. 三省堂.

小林賢次 (1996) 『日本語条件表現史の研究』 ひつじ書房.

小柳智一 (2016) 「文法変化の方向と統語的条件」 方法』 大木一夫・多門靖容 (編) 『日本語史叙述の方法』 pp.55-73. ひつじ書房.

定延利之 (2001) 「探索と現代日本語の「だけ」「しか」「ばかり」」 『日本語文法』 1 (1) pp.111-136 日本語文法学会.

永野賢 (1986) 『文章論総説』 朝倉書店.

前田愛 (1989) 『前田愛著作集第二巻 近代読者の成立』 筑摩書房.

益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法』 くろしお出版.

Matsumoto, Yo. (1988) *From Bound Grammatical Markers to Free Discourse Markers: History of Some Japanese Connectives.*

【凡例】 例文中の傍線部などは、特に注記がない限り、発表者が付したものである。

現代日本語における指示詞「かの」の機能について

恵泉女学園大学非常勤講師 竹内 直也 (Takeuchi, Naoya)
gontasensei0106@yahoo.co.jp

1. はじめに

指示詞の体系は古語 (少なくとも上代) においてはコソカの三項対立であったとされ、カ系指示詞はア系指示詞 (一部コ系) にとって替わられ、現在のコソアの体系が出来上がっていたといわれている (橋本 1966, 李 2002, 岡崎 2010 など)。

しかし、現代語においてもカ系指示詞は、「かく」「かの」など、文語的な表現であるとはいえ、一部は残っている。

(1) 多くは、他人の研究の周辺をあさることで、一生をついやすのが普通である。かくいう私もそういう研究者であった。(清水義範『蕎麦ときしめん』)

(2) 裸一貫、大志を抱いての上京と留学は、かの荻原碌山をほうふつさせる。(赤羽康男『北アルプス山麓をゆく』)

これらの例は使われるパターンも限定されていて、新たな用法は作りにくいとされる。

また、「かの」は「あの」と対応し、その区別については文語と口語の対であるとされているが、古田 (1957)、では、必ずしも「あの」と対応するものではないことを指摘し、熊谷 (2004) では「この」「その」と対応して使われるものがある点を指摘している。

(3) 姉、継母などのやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、所々語を聞くに、(更科日記、古田 1957)

(4) なじかは僻事をさせまられうずるぞと、申されたれば: 季貞参つてかの由を申せば (天草版平家物語、熊谷 2004)

それでは、現代語に残る「かの」は現代語の指示体系の中でどのように位置づけられるのであろうか。

本発表では、カ系指示詞、その中で連体詞「かの」について、「遡行的視点」(仁科 2016) から考察をし、「かの」の指示対象および用法は少なくとも明治期の「かの」とは若干異なる点、そして現代語で新たな機能を有し、指示体系の中から逸脱した用法が別に表れている点を指摘する。

2. 辞書の記述と「かの」の先行研究

現行の国語辞典で「かの」は、多くの辞書で共通して、「あの、例の」の文語的表現とされている。その中で特筆すべき記述を部分的に抜粋する (下線部発表者)。

(5) だれでもよく知っているはずの。(新明解国語辞典第七版)

(6) それまでの話とは関係ないが、話し手・聞き手ともに知っている事物を指す語。

(大辞林第三版)

(7) 話し手、相手両者から離れた、また、両者共通の事柄に関係のあることを指示する。現代語では「あの」よりも文語的な表現。(日本国語大辞典第二版)

これらの記述を総合すると、話し手・聞き手に共通理解があるものごとを指し示す語とまとめることができ、その性質は「あの」と共通していると考えられる。「あの」との違いは、